

私の見た日本の青春

レミ・コンバレ

ある土曜日、りんご農家の友人から昼食に招待され、彼の家を訪問した。その友人の子供が週休2日制で一緒に食事をしていたので、「学校が休みで嬉しいでしょう？」と聞いたところ、その子は「親が農業をやっているので、土曜日家にいても遊んでもらえなくてつまらない。学校があった方が友達と遊べるから楽しいよ。」と答えた。

私はその答えを聞いてとても驚いた。私の抱いている学校に対する気持ちと正反対だからだ。私が通っていた学校、特に中学は、あくまで「授業を受ける場所」だった。と言うより、私にとっては「刑務所」のようなところだった。窓には鉄柵がはめられていた、まるで生徒が逃げないように。

フランスの学校には入学式や卒業式、クラブ活動がない。新年度の第一日目に、授業のスケジュールが書かれたカードを渡され、それから一年間、昼休みや夕方に学校を出る時は必ず、そのカードを校門の係員に見せなければならなかった。そのカードには各自の名前と顔写真が貼られていたので、ずるいことはできなかった。

日本ほどしっかりしたクラス担任制度がフランスにはなく、進路・就職の相談までやってくれる日本の制度は羨ましい。私はどの大学を受験しようか悩んでいた時、文部省管轄の機関を頼るしかなかった。そこでは、希望する専攻を聞かれ、大学の一覧表を渡され、詳しいことは直接大学に問い合わせるよう言われただけだった。

アメリカの友達が、日本の高校の就職指導・活動を研究している。日本のこの制度は世界のモデルとも言えるので、いつかこの制度をアメリカに普及させたい、と彼は言っている。日本の教育制度に詳しいこの友人は、日本の教育がよく「個性の育たない教育」だと言われるが、決してそうは思わないとも言う。教育水準というものは数

値で表わし、全世界規模で比較できるが、個性は数値で比較できない。日本の生徒達が文化祭で一生懸命研究して発表するようなことは、アメリカの生徒達には難しいだろう、と彼は分析していた。

日本の教育現場では今、いじめが問題になっている。これは、友人関係が学校中心であることに問題がある、と私は思う。フランスでは、学校がない時は、市町村の施設を利用したキャンプやスポーツ大会などが盛んに行われる。こうして学校以外でも友達の世界が広がっていくのだ。ところが、長野の小・中学校ではあまりクラス替えが行なわれない、と聞いた。確かに、深くつきあえる友達ができた場合はいいが、そうでない場合はつらいことだろう。

東京への電車で、私の斜め前に向かい合って座っていた四人の中学生が、じゃんけんゲームをしていた。注意して見ていたら、いつも同じ生徒が負けて、負けるたびに残りの三人から平手打ちされていることに気が付いた。しばらく黙って見ていたが、誰も注意する気配がなく、自分でも耐え切れなかったので、三人のうちの一人を無理矢理私の横の空席に座らせた。自分が今やっていたことは何だかわかっているのかと、厳しく問いただすと、その子は「別にいじめじゃない。」と答えた。

周りの大人が気付いていなかった筈はないと思う。昔は、自分の子供でなくても、悪いことをしている子供には、近くにいる大人が注意したり叱ったりしたものだ。最近では、父親の権力が低下しており、子供を厳しく叱ることのできる父親がいなくなっている。厳しい父親に、優しい母親という、子供を育てる時のバランスが、今の家庭には見られなくなっている。

人生の中で一番楽しい筈の青春時代を、一人でも多くの子供達が幸せに過ごせるよう願っている。